松村謙三先生を伝えよう

松村謙三先生没後 44 年
記念事業

記念講演会　記録集

平成 27 年 12 月

松村謙三顕彰会

■ 松村謙三先生没後４４年記念事業の概要

●事業の記録として

松村謙三先生は、戦後の農地改革に大きな足跡を残され、さらに日中国交回復以前の基盤づくりにも尽力されたことがよく知られています。

政党政治家としての無私の信念と清廉潔白な政治姿勢は多くの信奉者を集め、政治家を志す人の理想像として伝えられてきました。

没後 44 年にあたる命日に、松村謙三先生の大いなる業績を再認識するため、記念講演会と記念企画展示会を開催しました。本編は記念講演会において講演いただきました、大東文化大学の武田知己先生の講演記録です。

●主催及び後援

主催/松村謙三顕彰会　南砺市日中友好協会　後援/南砺市

●内容

〇記念講演会

平成 27 年８月 21 日(金)

南砺市福光 5260　福光福祉会館 3 階ホール

基調講演

「松村謙三と日本のあゆみ」

講師：武田知己氏（大東文化大学法学部教授）

〇記念企画展示会

平成２７年８月 21 日(金)～２８日(金)

福光福祉会館１階ロビー

●記念企画展示品目録

(1)松村謙三の持ち物
①張作霖爆殺事件時に携行した旅行鞄　1928
②松村先生佩風のシルクハット
③勲章(従二位勲一等旭日桐花大綬章)　1971

(2)各種書簡
①重光葵短冊　1945
②重光葵氏書簡　1946
③重光葵氏から松村謙三宛書簡　1952
④重光葵氏から松村謙三宛書簡　1953
⑤吉田茂首相から松村謙三宛書簡　1948
⑥吉田茂首相から松村謙三宛書簡　1955
⑦松村謙三から吉田茂首相宛書簡　不明
⑧松村謙三から正力松太郎氏宛書簡　1923
⑨秋の叙勲における松村謙三・正力松太郎・大橋八郎の 3 氏　1964
⑩町田忠治氏への書簡　1946
⑪松村謙三から中野長作氏への書簡　1950
⑫松村謙三から村田豊二氏宛書簡　1952

(3)肖像画・その他
①正三位勲一等町田公墓誌　松村謙三書　1947
②松村謙三　色紙（近藤日出造画）　不明
③松村謙三　油彩画(石井鶴三画　衆議院議員永年勤続表彰記念）1959
④先憂後楽　1943
⑤松村松宇還暦祝い祝賀貼り混ぜ屏風　1902
⑥坂田秀男氏より寄贈された木彫額　1971

■ 講師のプロフィール

大東文化大学法学部教授　武田知己氏

●専門分野

政治学、日本政治外交、日本史

●学歴

1994 年 3 月　上智大学文学部卒業
1998 年 9 月　東京都立大学大学院（現首都大学東京）
社会科学研究科博士後期課程中途退学
2000 年 2 月　東京都立大学 博士（政治学）

●職歴

1998 年 10 月　東京都立大学法学部政治学科　研究助手
2001 年　4 月　日本学術振興会特別研究員
2004 年　4 月　大東文化大学法学部政治学科講師
2007 年　4 月　大東文化大学法学部政治学科准教授
2012 年　4 月　大東文化大学法学部政治学科教授

●著書論文等

単著　『重光葵と戦後政治』（吉川弘文館、2002 年）
共編　『重光葵　最高戦争指導会議記録・手記』（中央公論新社、2004 年）
監修　『重光葵　外交意見書集』全三巻（現代史料出版、2007-2010 年）
共編　『日本政党史』（吉川弘文館、2011 年）
共著　『歴代首相物語　増補版』（新書館、2013 年）
翻訳　アントニーベスト著『大英帝国の親日派』（中公叢書、2015 年）

■ 基調講演記録

「松村謙三と日本のあゆみ」

武田　知己
たけだ　ともき
大東文化大学法学部教授

●はじめに

本日は、戦後７０周年という節目にあたり、「松村謙三先生没後４４周年記念事業――松村謙三先生を伝えよう――」の講演者としてお招きいただき、ありがとうございました。学者の端くれとしまして、私が尊敬してやまない政治家・松村謙三先生の生まれ故郷で話をさせていただけますことは、大変な名誉でございます。このような機会を与えてくださいました松村謙三顕彰会はじめ、関係者のみなさまに厚く御礼申し上げる次第です。

私が福光という風光明媚なところに初めて足を運びましたのは、記録を見ますと、２００２年のことです。それから２００９年までは毎年一度、多いときで二度は訪れている計算になります。最近は、２０１１年１１月、没後４０周年に福光町でお話しさせていただきました。謙三先生が講演されたことがあるという願全寺での講演でしたので、感激しました。また、例の大震災の年でございましたが、私の故郷は福島県でございますので、いろいろな思いがあったことも思い出します。それ以来ですが、今回のご招待で、福光訪問の回数は、もう少しで両手に届くか超えるか、といったくらいになろうかと思います。

●松村謙三への興味

私が松村謙三という政治家に強い興味を持ったのは、私の大学院生時代の研究テーマとの関係でした。私は、重光葵（しげみつ　まもる）という外交官の研究をしておりましたが――２０００年に学位請求論文を提出し、受理され、のちに『重光葵と戦後政治』（吉川弘文館、２００２年）として刊行されました――、謙三先生は、太平洋戦争中から晩年にかけて、彼と浅からぬ因縁を持っておりました。謙三先生は、東條英機内閣・小磯国昭内閣の外相であった重光の演説を聞きまして惚れ込み、戦後、改進党（後述の明治の改進党とは異なります）という政党の総裁に彼を推薦することになるのです。謙三先生は回顧録で次のように言っています。重光を極めて高く評価していたことは明らかです。

「私は、［戦時中――講演者注。以下同様］翼賛政治会の政務調査会長、それから大日本政治会の幹事長であったが、時局がしだいに悪化していくのに事情がくわしくわからない。これが人心の不安をまねき、戦力へ影響するのを心配していたが、重光［葵］外相は機会あるごとに必ず大日本政治会にきて、よく外交事情を説明された。その説明の内容が実に要領がよく、外交の推移についての微妙な点でも、その方向、方針なりについて、よく納得できたものである。この重光氏の考え方、やり方をみて、私はこれは相当なものだという印象を得て、は

じめて同氏を認識もするし、それから交際を重ねることにもなった。それから戦争も終わりごろになってから、重光氏は南京政府の汪兆銘氏の顧問となった。そのときに私がたずねていくと、憂色をたたえて、軍の方針と外交の方針とがくい違う苦しみを吐露されたことがあったが、そういうことから交際も一層親密になった」（松村謙三『三代回顧録』東洋経済新報社、昭和３９年、２９８頁）

また、私が私淑している伊藤隆東京大学名誉教授が、１９８０年代半ばに『重光葵手記』正続（中央公論社、１９８６年、８７年）という史料集をまとめていらっしゃいますが、その中の重光の戦後の日記に、たびたび松村の名前がでてきます。松村は文字通り戦後の重光を支えた政治家でした。重光が１９５７年に死去した時、テヘランにいた松村はイラン大使・山田久就から重光の死を聞かされ――山田は福野の出身で松村とは旧知でした――、「外地に会って知己の死を聞く気持ちは実にいいようもなく、生前の交誼を思うて、堪えがたい哀悼の念にうたれた」（同前、３０２-３０３頁）と書いています。ここまで重光を支えた政治家とはどのような人物だったのかという点から彼に関心を持った次第です。

私が、謙三先生の書簡や原稿の草稿などの存在を知ったのは、前述したように、２００２年頃、前述の伊藤先生の紹介からでした。伊藤先生は、櫻田会という謙三先生とも縁の深い団体から松村の政治上の師といってよい町田忠治の伝記を刊行された関係で、すでに松村記念館の文書を調査されておりました。伊藤先生の紹介で、１９９９年に彼の秘書であった小楠正雄氏の資料をお借りして前述の学位請求論文を書きましたが、その後、２００２年に先生からの示唆で、友人と一緒に松村謙三研究に本格的に着手したのです。数年かけて、松村寿氏の所有されていた文書、小堀治子さんの所蔵の文書、櫻田会に保存されていた小楠氏の文書という三か所にあった資料を櫻田会の協力で一堂にあつめまして整理し、『松村謙三関係文書目録』（近代日本史料研究会、２００７年）としてまとめました。それからもうすぐ１０年になります。時のたつのは本当に早いものでございます。

●戦後７０年を問い直す

さて、今年は、謙三先生の没後４４年である以上に、戦後７０年になります。

先週先々週あたりから、終戦の日の前後には、テレビや新聞でいくつかの特集がありました。しかし、今年、気がついたのは、昭和のとらえ方も変わったな、ということでした。先日観たのは、若いタレントが、戦争体験を伝えてもらうというテレビの企画でしたし、つい先ごろは彼らが戦争にゆかりのある場所に赴いて感想を語るといった企画も拝見しました。いいかえれば、今年は戦争の生き証人の出演を見ることが難しかったのです。

考えてみれば、戦争体験者が自らその体験を語るには７０年というは少し長すぎる時間のようです。戦争とは何なのかを伝えることが物理的に相当難しい時代になったと言うのが戦後 70 年の私の第一の感想です。

もちろん、その前の時代はさらに遠くなっています。今年のテレビの特集などを見ても、戦争に至る道に関して新しい資料や視点から編まれた特集でめぼしいものも、一、二をのぞいてなかったといえます。あの戦争もそうですが、一般に戦争に突入する決断も、戦争を終わらせる決断も、簡単に出来るものではありません。そういった「決断の瞬間」がどのよう

にやってきたのかを考えるつづけることは、近現代の日本の政治の研究において極めて重要なのですが、そういったことには余り関心が向けられていないように思いました。それも戦争体験者の不在ということと関係があるのかもしれません。

ご存じのとおり、世間には「昭和史」という言い方があります。私は好きな言い方ではありませんが、従来の昭和史というのは、戦争への道とはどんな決断の積み重ねの上になりたっていたのか、を常に念頭に置いてきたものです。しかし、今年は、戦争自体は悪であり、そういった悪に反対し、距離をおけば、平和がやってくるというような空気があるかのようでした。逆に、あの戦争は正しかったのだという真逆の考えも、はばかるところなく提示されているようです。「平和」を考えることは、「戦争」を考えることであるはずですし、逆もまた真実です。あるいは永遠に対立するとも考えられがちな戦争と平和の双方を考え続ける中で戦後の最も良質な知的空間が築かれてきたと思うのですが、そのような雰囲気も決定的に薄れてしまっているように思います。それが第二の感想です。

講演中の武田知己氏

●国づくりの時代への回帰？

しかし、若い世代が過去への関心を全く失っているかと言えば、そうではないと思います。日々学生と接していましても、彼らは実は歴史に強い関心を持っています。今年、安保法制に賛成反対の議論があれだけ盛り上がったのも、そこに過去の戦争への彼らなりの考えがあったからに違いありません。とはいえ、学生の中には、昭和ではなく、戦国時代から江戸時代にかけての関心が強いものも少なくありません。ゲームの影響もあるのでしょうが、学生たちは、戦国の世を生き抜き、成功した武将たちにこの閉塞感の強い時代を生きる自分を重ね合わせているかのようです。それは、彼らが彼らなりに切実な気持ちをもって過去に目を向けている証拠であると考えるべきであるように思います。

そして、彼らに「現代の歴史学界では、戦国時代が終わる頃、つまり、織豊政権時代に天下統一が成るころから、現代につながる国のかたちが整い始めるとする見方がある」というと、「なるほど」という結構良い反応が返ってきます。少なくとも、徳川時代――いわゆる「近世」――には、近代的な国家の原型といってよいような性格が、この国に備わり始めているという説に私も賛成していますし、現在の若者は、こうした「国づくりの時代」に無意識に

でも関心を寄せ始めているということができるのだろうと思います。幕末の政治史への関心は今も昔も強いのですが、現代のように既存の制度が壊れていく時代をそこに反映させることもできるかもしれません。

●歴史の中の松村謙三

謙三先生の話をしたいのに、なぜこんな歴史学概論のような話をしたかと言いますと、実は、最近、松村謙三という政治家の人生を、こういった少し大きな近代日本のあゆみと重ね合わせると面白いのではないかと思うようになっているからです。

ここでいう近代日本の歩みを、わたくしは、今申し上げたように「国のかたち」が形成されていく時代を下地に、他のアジアの国々が西欧文明に窓を閉ざす中で率先して近代文明を取り入れ、それを元々の基盤にいわば「接ぎ木」してゆく過程のことだと考えます。言い換えれば、近代日本は、黒船来航により、一夜にして近代国家になったのではなく、戦乱の時代を平定する様々な努力の中でできあがっていった社会基盤の上に花咲いたものだと考えているのです。そうした下地なり、基盤なりのあるものは近代化の中で破壊されますが、あるものはしぶとく残っていきます。ある国の伝統というものは、簡単に壊れるようなものではなく、大変強いものなのです。

では、一体何が残ったのか。一つだけあげるとすれば、それは近世という時代の中で形成されていった地域共同体だったと思います。そうした地域共同体に支えられながら、近代日本は小さいながらも統制された産業と政治体制を整えた国家へと成長していきます。明治と言えば、殖産興業とか上からの近代化などといいますが、経済史の分野ではそうしたステレオタイプな議論とは異なり、近代化を支えた主体として地方の名望家層を中心とした地域共同体に着目する研究が見られます。それは実は当時の政治秩序とも適合的です。近代化を始めたばかりの日本は、地域にたくさんの優れた指導者が存在していた国であり、彼らが形作る政治秩序が上からの近代化を受け止める器として存在していたのです。

もっとも、周知のように、日本の経済的成長は、第二次世界大戦によって、いったん鈍化します。しかし、他方で、あの戦争は、日本の産業構造や人々の意識を変革するのに、逆説的ですが、大いに役立ちました。例えば、あの戦争がなければ、日本の経済構造の重工業化は進まなかったでしょう。もちろん、1950 年の朝鮮戦争がなかったら日本の基盤産業は軒並み倒産していたかもしれないということも言えますし、戦後と戦後の諸改革こそ重要だという見方もあります。私もそういった要素を否定はしませんが、特に日中戦争以後、英米の援助や貿易が途絶するなかで技術開発や自己変革に挑戦した戦時下の経済経験がなければ、矢張り戦後の基幹産業の発展はなかったと思います。戦後の経済成長を支えた企業の多くが、実は戦時期にその起源を持っていることは、その証拠になるかと思います。

さらに、あの戦争で人々の意識も変わりました。日本人は、特殊な性格と壮大な規模を持つ、日本史上、空前絶後というべきあの戦争を経験することで、大きな自信を得ると同時に、平和の大切さを実感します。多くの人は、自国の繁栄を維持する方法として自由と平和を心の底から希求するようになり、それを最大の価値と考えるようになります。日本が経済大国となった原動力の一つは、こうした戦後を支えた世代の心理的な欲求であったことも、間違いないと思います（ジョンダワー／明田川融訳『昭和』みすず書房、２０１０年）。

政治的にも戦争は役に立ちました。日本の民主政治は、戦後にようやく始まったという見方には根拠がありません。戦後の民主政治はのちに述べるように、明治以来、戦前・戦時にも連綿として続いていた政党政治の伝統の上に、はじめて花開いたものであって、戦争は、そうした伝統の正しさと大切さを日本国民に実感させたのです。

ですから、戦争とは、大きな時代の流れをみれば、断絶ではなく、世界史的にもまれな経済成長・近代化の成功という日本のあゆみを考える上で、戦前からの連続性において考えてもよい出来事だと思うのです。

●松村謙三と日本の「成熟」

そして、松村謙三という政治家の歩みは、そういった意味での大きな歴史の流れとある面では重なります。つまり、松村謙三は、日本の「成長」と「成功」を指向した日本の近代を生きた日本人の一人でした。松村謙三は、まさにこの風光明媚な福光という地域に支えられ、またその発展を支えつつ、国と地域の成長と成功を支える一角を担います。その結果として――誤った形ではありましたが――生じた戦争からも決して逃げようとせず、戦時期には大政翼賛会や大日本政治会の中心人物として日本政治を支える一役を担います。

しかし、同時に、彼は、日本社会の進むべき方向をむしろ「成熟」の方向へと切り替えようとした政治家でもありました。この場合の「成熟」とは、成長や成功とはかならずしも矛盾しませんが、それよりも社会の質や豊かさの質、そして社会の安定を志向するものです。私は、彼の政治的人生を、成長や成功とある意味で重なりつつ、ある意味でそうした方向へのブレーキをかけるような存在、良い意味で政治的に深い陰影を持つ存在として捉え直したいと思うのです（注）。

（注）こうした視点は、例えば、武田知己・萩原稔編『大正・昭和期の日本政治と国際秩序――転換期における「未発の可能性」をめぐって』思文閣出版、２０１４年）の「総論」を参照のこと。

今日は、そういった観点から、謙三先生の私なりの評価をお話させていただければと思いますが、以下では、謙三先生の人生を、三つの分野で評価したいと思います。それは、謙三先生の伝記を書いた木村時夫早稲田大学名誉教授の議論（木村時夫『松村謙三　伝記編』櫻田会、１９９９年）を、私なりに咀嚼して言い直したものです。

すなわち、

第一に、議会制民主主義の発展を目指すという分野

第二に、日本とアジア、特に中国との安定した関係構築を試みるという分野

第三に、日本の社会基盤としての農業問題を考えるという分野

の三つです。

以下、それぞれの分野に分けて、お話ししたいと思います。

●第一の柱：議会制民主主義の発展

松村謙三は、一般に清廉の政治家として、ある一定より上の世代から評価されてきたと思

います。名秘書であった田川誠一氏はそういう側面を強調した代表的な人物の一人です。それは多くの人の共感を得まして、松村の姿は、民主主義の下での政治家の理想像であるとも考えられてきました。私も、かつて松村記念館にきたときに、展示品の中に、謙三先生が揮毫する筆を指していた「空き缶」というのがありまして、大いに感銘を受けたものです（注）。

（注）こうした松村像として、田川誠一『松村謙三と中国』（読売新聞社、１９７２年）、安藤俊裕「政客列伝　松村謙三」（日本経済新聞ウェブサイト、２０１２年掲載）など

しかし、謙三先生の政治家としての資質を問うのであれば、清廉潔白であったか否かよりも、まずは日本における議会政治確立の信念がどのようなものであったのかを最初に評価すべきだと思います。

ご承知の通り、日本の議会政治の伝統というものは、明治以降漸く生まれたものに過ぎません。しかも、その伝統は藩閥政府への対抗心に彩られたものとなりました。薩長土肥を中心として成立し、やがて薩摩と長州の二藩を中心として運営される明治政府は、権力から排除されたものたちの怨恨の対象となったのです。こうして権力参画を拒まれたものたちが作り上げたのが日本の政党の起源であり、いわゆる自由民権運動の始まりとなります。それが日本の議会政治の伝統を築き上げる上での重要な要素となっていきます。

松村謙三は、こうした自由民権運動が政府と激しい闘争を繰り広げ始めた頃に生まれました。中学時代には、西郷隆盛や馬場辰猪等に傾倒していたことからも察せられるとおり、自由民権運動に強い共感を示していた謙三は、熱心な改進党支持者であった家系に影響を受けて、自然に改進党の支持者になります（『松村謙三関係資料目録』近代日本史料研究会、２００７年、「解説」参照）。

実は、大隈重信を頭目としたこの改進党という政党は、ある意味で、日本における政党の一つの理想像を体現する党であったことが重要だと思います。

第一に、改進党は、集票よりも政策実現を重視する政党となります。もっとも、改進党の向こうを張った自由党という政党は、旧時代の支配階級であった旧武士層と明治新政府の政策によって利益を得た豪農層に支持され、地方にしっかりとした支持組織を持っていたのに対し、改進党はそうではなかったという組織の相違も重要な要素でした。しかし、大隈重信をはじめ、改進党を支えた明治の知識層は、政治とは政策に訴えることであり、それを通じて票を獲得することだと考えます。

第二に、改進党の政策は保守的であると言うよりも進歩的であることを目指しました。今も昔も、「二番手」の政党は、既得権益を打破することを指向する政策を選び、既存の利益の体系から阻害された層の支持を掘り起こす必要がありました。ですから、その政策は旧支配層・豪農層ではなく、新興都市階級や中小企業・労働者の支持を得やすいものでした。明治中期、産業革命を経て、近代日本が社会問題を抱えはじめる中、改進党の政策は大胆に言えば社会民主主義的な性格を持つものになりますし、日本が対外拡張を目指す中、領土拡張よりも貿易の伸張を目指す路線を選択することになります。

第三に、改進党は、権力獲得よりも言論や理念を重視しました。特に自由民権運動がやがて激化し、過激な選挙運動・政治運動を展開してゆく中、1880 年代には政府と民権派、自由

党左派との武力衝突も起きます。松村家に金沢から有名な遠藤秀景という壮士がやってきたときのことを、謙三は回顧録に残していますが（前掲、『三代回顧録』１１頁）、改進系は言論戦や理念の提示を重視する穏健路線を採用します。

こうした二つの政党の伝統は、自由党のそれが政友会に、改進党の特徴は、松村謙三が入党する立憲民政党に受け継がれます。しかし、結党から苦節 10 年を経て、1924 年になって漸く政権の座につくまでに、改進党の伝統を引き継いだ民政党は、こうした初期の改進党の精神を変容させていきます。もちろん、それは政権をめざす党としては当然の変質といえるものでした。他方で、早稲田を卒業後、新聞記者となり、その後福光に戻って 15 年を過ごした松村は、そうした精神を保ち続けました。彼は『三大回顧録』などで、島田孝之との関係や大隈重信との出会い、そして高田早苗、安部磯雄らの理念や思想への傾倒を――彼らはすべて初期から改進党を支えた系譜にいる人々でした――たびたび吐露しています。彼の政治家としての資質が、改進党のそれと大きく重なるものでありましたが、より正確に言えば、それは純粋民政党系のそれといってよかったと思います。

そして、そうした傾向は、戦後の自民党の良識派としての松村が、権力闘争よりも政策を重視し、利益の拡大よりも分配を重視し、暴力よりも言論の力を信じたこととともつながります。彼の政治理念は、こうして戦後にまで持ち込まれていくのです。

さらに、今後の研究に待つべき課題ですが、松村が、議会を政策論争や政治のヴィジョンを論じる場として捉えていた理由の一つに、彼が敬愛していたイギリスの政治家であり思想家であったジョン・スチュワート・ミルの影響もあったようです。松村は近代日本を代表する啓蒙思想家であった中村敬宇の弟子であった遠戚・松村西荘を通じてこのミルの思想を受容しています。早稲田時代に松村がどれだけヨーロッパの啓蒙思想を受容したのかは興味深い課題です（松村謙三「敬宇先生の遺稿」『花好月圓』所収）。

いずれにせよ、こうした政治観は、実は日本において必ずしも受け入れられるものとはならなかったのでした。ミルの議会政治観は、今でも、議会政治の古典として繰り返し読まれ続けていますが、それは日本の議会政治のあるべき姿を求め続けたある種の「挫折の歴史」と関係しているように思えます。松村謙三の歩みも、そういった視点から考えると最もしっくりくるように思います。

●第二の柱：中国・アジアと日本の架橋

さて、松村謙三の第二の柱は、彼とアジア・中国との安定した関係を構築するという試みです。

松村はいつ中国に関心を持ったのでしょうか。松村家は、名望家一般にそうであったように、漢籍や中国の文物を数多く所有していたようです。謙三は自然と幼少期から中国へのあこがれと尊敬を持つようになったようですが、世紀転換期の日本ではいわゆる大陸浪人と呼ばれるアジア主義者が多数存在していました。松村もそうした時代の子であったことは間違いないと思います。日記をみますと、早稲田の学生時代には、中国語を学ぶことを楽しみにしていたことがわかりますし、在学中の１９０４年には、中国からの留学生を獲得する為もあり、中国視察に赴いた早稲田の中国語教師・青柳篤恒に連れられて初めて中国旅行に赴きました。それは、松村の政治的生涯の上での一大イベントというべきものでした（注）。

（注）この様子については、木村時夫「松村謙三　明治３７・８年中国旅行記」上下『早稲田人文自然科学研究』３５号、３６号、１９８９年)。

もっとも、清朝末期の中国を見聞した若き松村謙三は、実は中国の都市の不衛生さや市民のふるまいにおける民度の低さに失望します。逆に言えば、松村はどこかで中国を理想化していたところがあったようです。とはいえ、重要なのは、日本が中国より優越しており、中国を我がものにできるとは考えなかったところです。松村は、当時から中国において新しい世代が生まれ始めていることに着目し、青年層の未来に大きな期待を寄せることになります。それは、当時アジア主義者や大陸浪人などと言われた人との決定的な違いでしたし、それは晩年まで続く松村の政治理念の一つとなります（以上については、武田知己「戦前及戦后的松村謙三訪華」李卓『近代化過程中東亞三國的相互認識』天津人民出版社、２００９年)。

もちろん、松村は日本こそ「アジア唯一」の大国であるという意識はあったかもしれません。しかし、それ以上に、そうした強者こそ、より徳のある振る舞いをすべきであると彼は考えていたように思います。少なくとも、彼には改革され、よりよい国――当時の言葉で言えば「立憲国家」になった――中国の登場を心待ちにする余裕を持っていました。

それだけでなく、１９２３年に親友の永井柳太郎とともに中国視察に訪れた松村は、すでに共和国を打ち立てていた中国と比較しながら、日本政治の大変革を主張するようになります。言ってみれば、共和国となった中国は、民主化という点において、日本よりも進んでいるとさえ、考えるようになっていたのです（同前)。

その後も何度も中国を訪れたと松村は言っていますが、松村は、いわば改革された中国と改革された日本の提携を目指した政治家であったと思います。

こうした戦前の中国との関係構築の基本的な考えは、戦後にも続きます。松村は、中国共産党の対日工作担当者であった廖承志とのルートを活用して、国交のなかった共産中国と日本との橋渡しを試みます。またその間には堀池友治という人物を仲立ちとしていたこともわかっています。こうして１９５９年の第一回の訪中が実現、その後、１９７０年に５回目の訪中を実現するまで、日中に国交のない中、政治体制が異なるだけでなく、文化大革命の嵐の中、中国政局が混乱する両国の間を取り持とうとした松村の足跡は、戦後日本外交の一ページを築くもので、長く歴史に残るものでしょう。

その際、松村は、中国が共産主義国であることにこだわることはしませんでした。むしろ、中国の改革の向かう方向がどこであるかを日本に紹介しようとします。松村は、文化大革命は民族国家を作る上での混乱の一つであると考えたのでした。それが、国民革命時の中国を単なる「混乱」と見ずに評価した戦前の松村と同じ発想であることは一目瞭然でした。

他方で、松村は自民党政治の批判者として晩年を過ごしたことは周知の通りです。それは自民党の主流が権力を独占しているように見える状態への批判でした。６０年前の松村は、まるで戦前に果たせなかった夢を果たすかのように、改革された中国と改革された日本の提携を望み続けたといえるように思います。

●第三の柱：社会基盤としての農業問題の解決と発展

最後の第三番目の柱は、農業問題でした。事実、１９２８年に第一回の普通選挙で当選してからの松村は、師と仰いだ町田忠治のアドバイスもあり、農政にかかわり、その後は終始一貫して農政畑を歩みます。政治家松村は、農政のエキスパートとなったわけです。

もっとも、早稲田時代の松村は、将来は新聞記者で立つつもりだったといいます。政治家となる志をいつから持っていたのかは今後の考察に待つべきですが、すぐに政治家になる自信や準備がなかったのかもしれません。そして、中国旅行から帰国後の松村は、卒業したら叔父の谷村一太郎の下で働いてほしいという父の意向を尻目に、高田早苗の紹介で大隈の息のかかった報知新聞で大卒幹部候補生として働き始めます。

実は、そのために急きょ書き上げた卒業論文のテーマとして選んだのが農業問題でした。中国視察から帰国後数ヶ月でかかれた卒業論文『日本農業恐慌論』（１９０６。木村時夫編『松村謙三　資料編』に全文所収）は松村の最初にまとめられた学術的な文章ということになります。それは先に述べた農政とのかかわりを考えると奇縁と言ってよいものだと思います。

もっとも、このとき、松村は、そもそも「我が国の社会問題」を論究しようとしたと述べていることは重要だと思います。この論文で、松村は、ナポレオンのヨーロッパ統一からはじめ、一種の文明論から筆を起し、やがて明治以降の日本の農業政策を批判的に検討しているのです。

では、「社会問題」に関心を持っていた松村は、一体なぜ、「農業」に関心を寄せているのでしょうか。それは、松村が農業問題――すなわち、農村をめぐる諸問題――に日本における社会問題発生の危険を感じていたからでした。

特に松村は日本における過激な社会主義思想の蔓延に強い警戒心を示しています。そうした危惧を、松村はやはり文明論から説き起こします。その立論はこうです。

まず、ヨーロッパにおいて産業革命が発生して以後、ヨーロッパでは「社会問題」が発生し、それを通して「社会主義」及び「社会党」が発生した。それを日本に適用してみれば、次のようになると松村は言います。

「政治的の観察は茲に除外し、単に経済上の立脚点より之を観れば吾人は其の［社会主義思想の］蔓延の危険なる決して欧米の社会に譲らざるものあるを見る。（中略）全人口の三分の二を占めたる吾が国の農民が鍬を捨てて飢えに叫ばん時、滔天の洪水を防ぐべき社会の長堤は果たして何処にかある」（以下、引用は前述『松村謙三　資料編』より。ページ数省略）

つまり、松村は、農村の悲惨な状況を政治をとおして解決する組織がない明治末期の日本には、過激な社会主義が蔓延し、国家が破綻する可能性を感じていたのでした。それ故、松村は、農村の疲弊を避けるために、政府は農業生産の拡大と保護に真剣な努力を払うべきであるというのです。いわば、松村において、農業問題は、農村問題であり、社会問題であり、政治問題でした。

しかも、それは日本の対外関係とも、結びついているものでした。人口の過多、耕地の狭小、生活程度の進歩の欠如に悩まされる日本の農村においては、明治以来の数々の農業保護政策が行われてきましたが、農民の困窮を救う効果に乏しかったし、海外農産国の競争と圧迫が国内の生産、特に米価の不安定を招いており、更に産業組合も海外農産品との競争から

農民を守ることが出来ないでいる。特に農民の負担となっている地租の軽減あるいは全廃も、明治政府を襲っている歳入不足を考えれば到底不可能であるし、農産品に高関税をかけて国内農業を保護する保護貿易にも松村は懐疑的でした。そして松村は、急激な変化か緩慢な変化かはともかく、このままでは必ず日本の農業は衰退すると述べ、次のように結論付けています。

「吾人章を積み、節を重ねて我が農業の恐慌が必ず近き将来に於て出現すべきを論ぜり。（中略）今や我が国民は其の戦勝（日露戦争の勝利のこと―注）の光栄に酔い、徒に対外の大発展をこれ夢みて復た内を顧みるの念なしと雖もこれ一つの空中楼閣に過ぎざるのみ。農業の前途果して前述の如しとせば我が社会は先ず内より解体せんとす。此の時に当りて亦何の海外発展かある。恒産ありて恒心ありとは争うべからざる真理なり。我が農民が其の業を失して飢餓身に迫る時、あに愛国あらんや、節度あらんや、将た亦政府あらんや。その結果唯暗黒あるのみ。破滅あるのみ。惨として恐れざるべけんや」

つまり、松村は、対外発展を控えて「我が社会組織の変更」こそが大事なのだと言っているのです。恐らくは、そこにそもそものテーマであった「我が社会問題」を論じる最大の問題意識があったのだろうと思われます。

しかしながら、周知の通り、この後の日本は、植民地帝国としてアジアへの拡張を進めていきます。紆余曲折はありましたが、日本は満州国の建国や東亜新秩序、そして大東亜共栄圏構想を打ち出したのです。こうした経緯を詳しく見ることはできませんが、若き松村が、そうした発展よりも政治の質的な転換を求めていたことを知ると、「成功」や「成長」よりも「成熟」を求めていた松村政治の理念の原点を、そこに発見できるように思います。

●おわりにかえて～松村謙三の政治基盤としての福光・富山・北陸～

以上、松村謙三の足跡にみる三つの柱を駆け足で概観してきました。

こうした議論は少し学術的すぎるかもしれませんが、私の世代の松村謙三への関心、あるいは彼を通じた近代史への新しい研究関心の一つは、以上のような点にあるということで紹介させていただきました。

つまり、彼を通じて、この答えのない時代の問題を考える手がかりを掴みたい、というのが私の関心なのです。それは、おそらく、私の前の世代の日本人が松村謙三という政治家に政治家の理想を見たのと同じ心性の働きなのだと思います。

こうした関心を実践するためには、少なくとも、松村謙三を神格化するのではなく、彼の書いたもの・話したこと・残された証言等を用いて、歴史の大きな流れの中で彼の生涯を解釈することが必要になると思います。

そうした際に、一つは、彼の戦後の資料が不可欠です。現在まで、彼の戦後の記録があまり見つかっておりません。彼は保守合同に反対しましたが、そのころの松村の考えをどう理解すればいいのか、また、彼は中国だけではなくＥＥＣ諸国や中東・東南アジアも訪問しますが、そのころの国際情勢の考え方も気にかかります。まずは、新聞記事や雑誌記事を丹念に追う作業が必要となるように思いますが、実は、謙三先生は北日本新聞や富山新聞に実に

多くの記事を寄せております。そうした調査が必要かと思います。例えば、北日本新聞に連載した『三代回顧録』『続三代回顧録』などがそうした典型で、完本とは少し異同もあり、調査の必要性は大きいと思います。

また、戦後の松村は日中国交正常化前の日中関係を支えた人物として永遠にその名を戦後史に刻むと思いますが、その前にアジア歴訪・EEC 歴訪も行っていることが重要だと思います。つまり、松村訪中は、ヨーロッパ統合の動きや北東アジアを超えたアジア全域の動向との関連で行われたものでした。行ってみれば、世界の中での日本という意識が彼の外交行動の根幹にあったように思われるのです。その動きは、石橋湛山や池田勇人ら、彼の外遊に協力した政治家の思想と行動とも無関係ではありません。そうした点もきちんと論じられてこなったものにほかなりません。

二つ目は、早稲田の関係資料です。彼は大隈重信・高田早苗等に本当に可愛がられたようですし、永井柳太郎を始め、石橋湛山などとの交流も深いものがありました。そういった近代日本における早稲田人脈のなかで、彼を位置づけることも必要だと思います。

三つ目は、立憲民政党の歴史の中で松村謙三の歩みを再検討することです。松村は、町田忠治や永井だけでなく、中野正剛や斎藤隆夫とはどんな関係にあったのだろうかとか、金沢の青年党に支えられた永井と当時福光に蟄居していた松村との関係はどうだったのだろうかとか、関心は膨らみます。

最後の四つ目に、何よりも、この福光の松村家に大切に残されてきた関係資料を中心に、地元の資料を掘り起こし、研究に利用できるような仕組みがなければならないと思います。このたび、戦争の時代も、戦後の時代も、遠くなったこの機会に、福光のみなさんが立ち上がって、新たに謙三先生の足跡を後世に残そうとしてくださろうとしていることは、そういう意味で、研究者として大変うれしいことです。実は、謙三先生の回顧録をみてみると、福光を中心とした富山のことがたくさん出てきます。松村政治の展開が幼少期の師弟関係、友人関係、地元の支持者との心の触れあいに支えられていることを松村はよくわかっていたように思います。同時に、彼は福光地区を中心に、富山県の青年運動や青年団の組織化に度々関わりますし、地域振興にもさまざまに関与しています。そうした足跡も、遠藤和子『松村謙三』(KNB 興産出版部、１９７５年）をのぞいて、あまり伝えられてきませんでした。

ですから、福光というこの土地で生まれ育った松村謙三という政治家を本当に理解するには、この福光という土地を、富山県を、いや北陸というこの地域の歴史と文化を理解することが必要になるでしょう。みなさまには是非そういった地域の歴史を掘りおこすということも含めて、この事業にご尽力いただきたいと思います。

私も、研究者という立場から、微力を尽くさせていただきます。みなさまの新しい事業が実を結び、この希有な政治家の足跡が後生にきちんとつたえられる事を祈念いたしまして、私の話を閉じさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。(了)

※文面については、講演資料及び講演記録に基づき、講師である武田知己氏が記述されたものを掲載しています。

平成２７年１２月１５日　発行

●松村謙三顕彰会（南砺市福光行政ｾﾝﾀｰ）
〒939-1692 富山県南砺市荒木 1550 番地
Tel 0763-52-1111、Fax 0763-52-3232
HP「けんそはん」 http://matumurakennsyoukai.jimdo.com/

●南砺市福光福祉会館・松村記念会館
〒939-1654 富山県南砺市福光 5260 番地
Tel 0763-52-3022、 Fax 0763-52-3023